
嫌な上司の末路

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌な上司の末路

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

とんでもなく嫌な上司がいた、兎に角誰からも嫌われていたがその末路はというと。ユーチューブの漫画動画のオマージュ作品です。

第一章

嫌な上司の末路

徳光米助はとある企業の部長職にある、色黒で細い目をしてやけに下卑た卑しそうな顔立ちをしている、黒髪は安いポマードでセツトしていて小柄で痩せている。

卑しそうな顔立ちだが実際に心も行いも卑しく。

「人の手柄は横取りして」

「自分の不始末は押し付ける」

「偉い人にはへいこらしてな」

「立場が下の人間には凄い横柄でな」

「頼みごとする時はへらへらして」

「すぐに偉そうに何でも押し付けてくるな」

彼の部下や立場が下の者は口々にだ。

徳光のことを言う、兎角評判が悪かった。

「最低な奴だよ」

「ゴマを擦るだけで仕事出来ないしな」

「それも全く」

「専務と大学の先輩後輩ってだけで取り入って」

「それだけで出世してるしな」

「早く何とかなって欲しいな」

「会社クビになって欲しいぜ」

こう口々に言う、そして取引先でもだ。

彼についてだ、八条製鉄本社営業部の新入社員岩崎中は言った、茶色の癖のある髪の毛で眉は太い。剽軽そうな顔立ちで顔は小さく背は一七三センチ位で痩せている。

「あの、徳光さんですが」

「嫌な奴だろ」

話を振られた先輩はすぐにこう返した。

「あんな嫌な奴いないだろ」

「ええ、何かこっちを露骨に下に見て」

「偉そうでな」

「ふんぞり返ってですよ」

「酷い対応してくるな」

「ええ、ですから」

岩崎はそれと先輩に言った。

「俺あの人のところに行くの嫌です」

「俺もだよ、あっちでも評判悪いしな」

「取引先だけじゃなくてですね」

「無能でな」

それでいてというのだ。

「しかもあんな性格でな」

「人の手柄横取りしてばかりで」

「しかも自分の不始末押し付けてな」

「そんなことばかりなんで」

「それでな」

だからだというのだ。

「滅茶苦茶嫌われてるよ」

「やっぱりそうですね」

「だからな」

それでというのだ。

「お前が嫌うのもな」

「当然ですか」

「好きな人なんていないだろ」

「どうにかならないですね」

「なるだろ」

先輩は岩崎に素っ気ない口調で答えた。

「そのうちな」

「なりますか」

「ああいう奴は普通に碌でもないことしてるしな」

「あれ以上にですか」

「どうせ会社のお金ちょろまかしたりセクハラとかな」

「やってますか」

「ああ、ああした奴の常だよ」

それこそというのだ。

「だからな」

「そうしたことがばれて」

「クビになるだろ、むしろあそこまでやれたのがな」

「部長になるまで、ですね」

「悪運だろ、けれどその悪運もな」

「そろそろですか」

「終わるかもな、まあ見ていればいいさ」

こう岩崎に言うのだった。

「どうなるか、取引先としてな」

「早くどうかなくて欲しいですね」

それならとだ、岩崎は心から思っ先輩にこの言葉を告げた。彼は自分はまだ取引先だからかもしれませんが彼の勤務先は本当に嫌だろうと思っった。

そして後日徳光の会社に行くのだった。

第二章

彼がいなかった、それでその知り合いの社員に尋ねた。

「徳光さんは」

「クビになったよ」

その社員は岩崎に満面の笑顔で答えた。

「専務の収賄と脱税とセクハラとモラハラとパワハラがばれて」

「専務派だったのね」

「あいつもそうしたことしててさ」

収賄等をというのだ。

「しかも会社の金横領もしてキャバクラで遊んで」

「そんなことしてたんですか」

「そこのお姉さんに酔って襲い掛かって」

そうしてというのだ。

「思いきり急所蹴り飛ばされて」

「それは恰好悪いですね」

「大きい方まで漏らして気絶したところを」

そのうえでというのだ。

「襲ったこと通報されて」

「捕まったんですね」

「そこでこれまでの悪事が徹底的に取り調べられて」

「ああ、そこでなんですネ」

「悪事がばれて」

「警察に捕まって」

「それが専務派にも及んで」

そうになってというのだ。

「全員芋蔓式にだよ」

「捕まってクビですね」

「そうだったよ」

「凄い展開ですね」

「ちなみにお店の方の賠償金もな」

「これもというのだ。」

「漏らした分な」

「払わせられて」

「しかもそれが奥さんにばれて」

「そうもなっているのだ。」

「離婚で慰謝料だよ、娘さんにも袋叩きにされて」

「色々コンボが続きますね」

「もうすぐ刑務所行きだよ」

「それでいなくなったんですね」

「そうだよ」

満面の笑顔でここまで話した。

「それでな」

「もういないんですね」

「いい人が部長になってくれたし」

「そうもなっているのだ。」

「うちも大助かりだよ」

「いいですね、こっちでも評判悪かったし」

岩崎も自然に笑顔になった、そのうえで応えた。

「気持ちいい仕事が出来ますね」

「実際にやっぺいこうな」

その社員は明るい声で応えた、そうして実際に気分よく仕事をした。岩崎は会社に帰って先輩にその話をしたが。

先輩は頷いてだ、笑顔で彼に言った。

「ああした奴はな」

「そうなりますね」

「ああ、しかしそこまでなるなんてな」

満面の笑みになって言うのだった。

「凄いな」

「もう人生完全終了ですね」

「ああ、それであいつに言うことはな」

先輩はさらに言った。

「一つしかないな」

「何ですか？」

「ざま見ろだ」

「その言葉ですね」

「お前もそうだろ」

「本当に嫌な奴でしたから」

岩崎もそれだと応じた。

「思いますね」

「そうだな、本当にな」

「ざま見ろですね」

「ああ、よかったよ」

二人で満面の笑みで話した、そして徳光がいなくなったことを彼等の会社でも喜んだ。嫌な奴がその性根に相応しい末路を迎えた。そのうえでそれぞれの仕事に励んだのだった。

2
0
2
4
.
2
.
1
7

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~29225

嫌な上司の末路

2024年02月18日 21時32分発行